学びの質の高まりをめざして
～「吟味を生み出す対話」をつくる～

１．研究主題設定の理由について
（１）昨年度の研究実践から見えてきたもの

「学びの成立」へ

「学びの質の高まりをめざして～課題に向かう対話を深める～」というテーマのもとで研究を進めた昨年度，研究発表会の講演で秋田喜代美先生（東京大学大学院教授）から，次のようなご意見を頂いた。

①育ちが見える学校	固有名で子ども同士が語り合えている。
②子どもの言葉の層の厚さ	自分たちの言葉のたくわえがある。
③多様なテキストとの対話	すでにもっている知識とつなげられる。
④言葉の吟味，考えの吟味	言葉が流れていないか。 吟味することでもう１つ上の段階に。

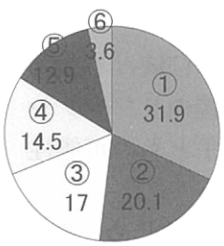
これまで，我々は学びを対象・他者・自己と対話することで熟成される三位一体の活動であると考え，実践を重ねてきた。「授業の成立」から「学びの成立」への意識転換を図り，子どもに寄り添い，一人ひとりの学びから学級全体の学びを見るという考え方をとってきたのである。また，正しい価値判断をもつこと，主体的・創造的な行動ができる資質や能力を育てることを目標に，学びの過程を重要視することで，子どもたちがより対象の本質や価値・真理などに迫ることができるようにしてきた。

課題に含まれるべきものとは

さらに，「ジャンプのある学び」を追究するために，小グループでの活動を重視し，協同的な学びをつくろうとしてきた。学習課題を，子どもたちから生み出されてきた問題の中から設定し，子どもたちが対象にどのような問題意識をもっているか，その教材の内包する価値は何か，ということを的確に把握し，ジャンプして手の届くようなもの，多方面からのアプローチが可能なものになるように心がけた。そうすることで，子どもたち自身が自己の課題をもって学び，対話を深められるように実践をすすめてきた。

しかし，秋田先生からご指摘いただいた「言葉の吟味・考えの吟味」については，子どもの学びの質をよりいっそう高めていくためにこれから取り組むべき課題である。子どもたちが三位一体の対話の中に，対象の本質や価値・真理などに迫るための吟味を生み出すことによって，学びの質の高まりをめざそうと考えたのである。

質問１４　【中･高学年】グループなどで一緒に勉強することのいいところは？　(%)



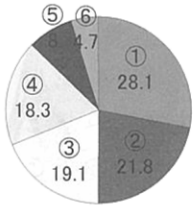
①友達の考えがわかったり聞けたりする
②新しい事を知ったり間違いに気付ける
③1人で考えるよりよくわかる
④話し合い，協力できる
⑤意見を言いやすい
⑥友達に教えられる

（２）子どもの実態から

本校では，これまでの研究により，多くの子どもが他者の発言に耳を傾け，さらに自分の考えを言うことができるようになってきた。そして，仲間の考えを受容的に聞き，自分の考えを更新していける子どもも増えてきた。

アンケート（2010 年 2 月実施）の質問１４より，自分の意見を言うことができるかどうかではなく，友だちの考えをじっくり聞きたい，理解したいと思っている子どもの割合が高いことがわかる。これは，小グループでの協同的な学びを続けてきた成果だと考える。質問１８においても，自分の意見

質問１８　[全校]
話し合いで友だちの考えと違うときどうすることが多い？　(%)



①友だちと意見を合わせる
②友だちの意見をよく聞く
③もう一度考える
④理由の話し合いをする
⑤友だちの意見に変える
⑥自分の意見をもう一度言う

をおしつけたり，すぐに変更したりする子どもは少なく，お互いの考えを合わせたり，友だちの考えを受容的に聞いたり，もう一度じっくり自分の考えを見つめなおしたりする子どもが約７０％いることもわかった。ただ，理由の話し合いをすると答えた子どもは全体の約１８％となった。

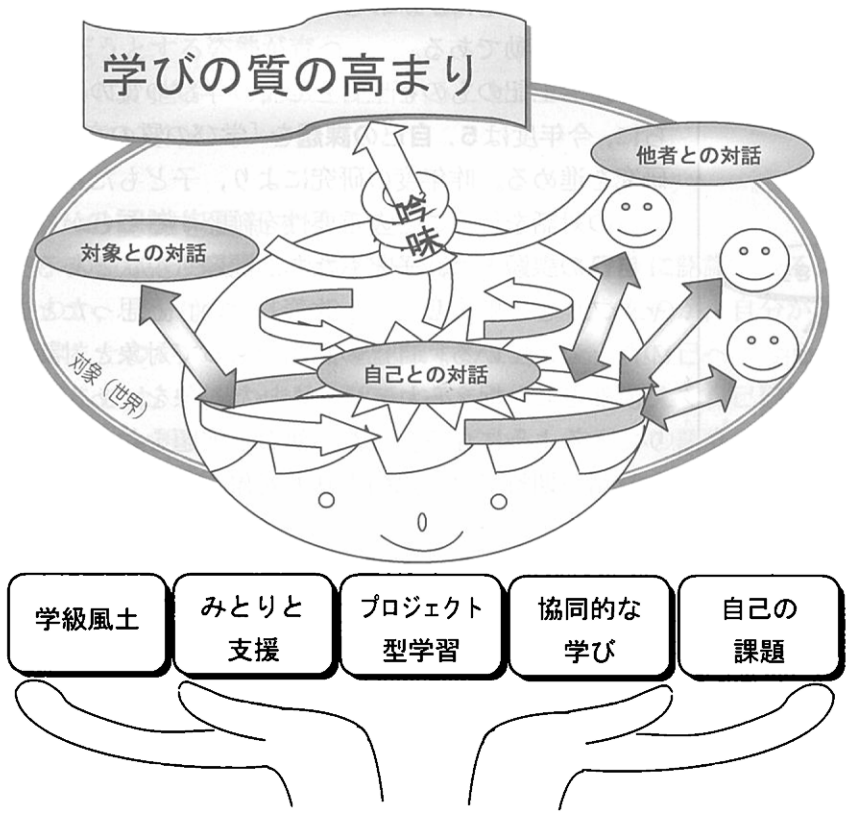
そこで，さらに子どもたちの対話を深めるために，子どもたちが思いや考えをもった理由や根拠を明確にしながら話し合えるような協同的な学びを進めていくことが必要だと考えた。(アンケート項目参照)

２．今年度の研究主題

上記のことを踏まえ，どの子どもも自己の課題をもって三位一体の対話(※後述）を行い，対象の本質・真理や価値などに迫る授業をめざしていく。そして，対話の中に吟味を生み出したいと考え，今年度の研究主題を次のように定めた。

学びの質の高まりをめざして
～「吟味を生み出す対話」をつくる～

学びの質の高まりをめざす全体像



３．「学びの質の高まり」とは

（１）「学びの質の高まり」を支えるもの

協同的な学び

我々は，これまでの研究において，「学びの質の高まり」を支えるものとして，以下のようなことを大切にし，昨年度は特に小グループによる協同的な学びに焦点をしぼってきた。

１．聴き合い，学び合える「学級風土」をつくる。
２．みとりと支援を積極的に行う。
３．プロジェクト型学習をつくる。
４．小グループによる協同的な学びを進める。

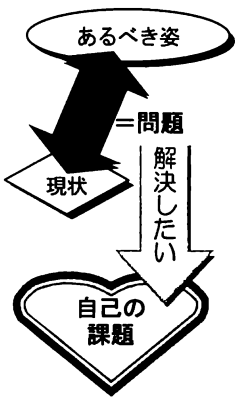
１．の**聴き合い，学び合える「学級風土」をつくる。**とは，学習に向かうその学級の姿勢や雰囲気（＝学級風土）を，互いの考えを受容的に受け止めながら学び合えるものにしていくことである。ここでは，教師もまた子どもたちと共に学ぶひとりである。

２．の**みとりと支援を積極的に行う。**とは，子どもたちの学びの様子を一人ひとり丁寧にみとり，学びへと導くための手立てをうつことである。みとりの対象は子どもたちの表現したものであったり，実際の子どもの学びの姿であったりする。そして，より的確な支援を行うため，必要に応じて着目児を置き，学びの変容を追うこともしていく。

３．の**プロジェクト型学習をつくる。**とは，２．の**みとりと支援**によって得られる子どもたちの学びの姿に寄り添いながら，学習計画を練り直し，より学びの大きい学習へと修正を加えていくことである。計画はしっかりと持ちながら，学びの様相に合わせてアプローチを変えていくのである。

４．の**小グループによる協同的な学びを進める。**とは，実際に学習の中に低学年ではペア学習を，また，中・高学年と学年が上がるにつれて４人グループで学ぶ機会を取り入れていくことである。自己の思いや考えを発信することの得手不得手にかかわらず，誰もが活躍できるのがこの４人グループであり，ペア活動である。

今後も上記のものを土台として「学びの質の高まり」をめざしていく。さらに，今年度は**５．自己の課題**を「学びの質の高まり」を支えるものに加え，研究を進める。昨年度の研究により，子どもたちが自己の課題をもって三位一体の対話を行うことの重要性を確認することができたからである。

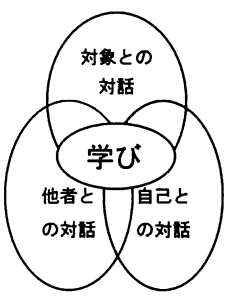


自己の課題とは，子どもたちが問題（現状とあるべき姿との間にできるギャップ）を「解決したい・改善したい」と思ったときに，それが変化したものだと考えている。自己の課題をもって対象と対話することにより，それまで漠然としか捉えられていなかった対象を，ある視点をもって見たり考えたりできるようになる。また，他者と課題を共有することにより，焦点を絞った対話が期待でき，以前よりも対象を深く認識することができるのである。

（２）三位一体の対話

子どもは自らの意思で目の前にある対象とかかわり，対象のもつ意味を明らかにしていこうとする。他者もまた，対象への興味をもち対象のもつ意味を探ろうとしている。そこで他者の対象に対する思いや考えに触れ，似ている点や違う点を明確にしていく。そして，他者と思いや考えを擦り合わせることで，多くの視点からのものの見方や考え方を得ていくのである。

「学び」
↓
三位一体の対話



このように，学びは，対象・他者・自己と対話することで成熟していく三位一体の活動であると考えている。それぞれの対話は，独立したものではなく，他の対話ともつながりながら進むものである。

（３）認識を更新すること

「学びの質の高まり」は三位一体の対話の中で，対象・他者・自己への認

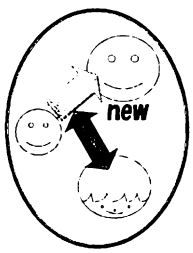
対象とかかわり
認識を深める。

識を更新することにより生まれると考えている。

①対象への認識を更新すること

今までもっていた対象への思いや考えが，三位一体の対話の中で，「実は～だった。」「やっぱり～だった。」というように更新されていく。対象にたっぷりかかわるだけでなく，多様なものの見方・考え方が絞られ，ひろげられ，分類・整理されていくことで，余計なものがそぎ落とされ，そして新たに必要なものが追加され，子どもは対象への認識を深める。

他者の変容から
ともに学ぶ。



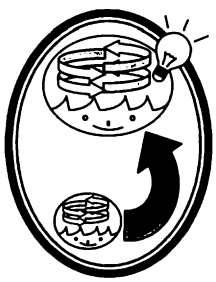
②他者への認識を更新すること

他者との対話によって，他者の学びの姿勢に共感し自分に活かせたり，他者の思いや考えに共感し共有できたりしたときには，対象の意味を捉え直すことができる。

また，協同的な学びから，他者の思いや考えにじかに触れ，「～の考えをもっていた～さんが～と考えるようになった。」といった，ともに学ぶ仲間の学びの変容までも認識していく。そうして，仲間のよさに目を向けると同時に，他者の存在の大切さに気づくようになる。その際，謙虚に聞こうとする姿勢，ともに学ぼうとする姿勢が育つ。

このように，他者への認識を更新することによって，集団としての学びの質が高まっていく。

対話から自己の
変容に気付く。



③自己への認識を更新すること

自己への認識を更新するとは，自分は対象をどのように認識できるようになったのか，自分は他者をどのように思うようになったのか，自分がどのように変容したのか，ということを認識することである。自己への認識を更新していくことは，自己の成長を認識することであり，加えて自己がまだ認識できないことを認識することでもある。だから，自己への認識を更新することは，問い続け，学び続ける子どもたちには必要不可欠である。

４．「吟味を生み出す対話」をつくる

「吟味」とは，物事を念入りに調べること，念入りに調べて選ぶことである。ここでの物事とは，対象への思いや考えをもった理由や根拠だと考える。よって，授業場面において，対象への思いや考えをもった理由や根拠を表出し，同様に他者の思いや考えをもった理由や根拠を聞き，互いに比較検討し合うことが吟味に値すると考えるのである。そして，それらの理由や根拠は，子どもたち一人ひとりが自己の課題として意識しながら学ぶ中でたどりついたものであり，学び合いの中で互いに共有できるもの（同じ土俵で，同じ視点で対話できるもの）でなければならない。また，それは自ずとより価値の高いもの，より客観性のあるものとなる。それらの条件が整うことで，対象の本質・真理や価値に迫ることができるであろう。

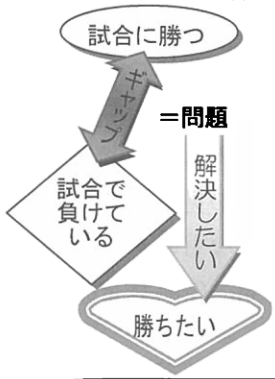
また，思いや考えにそのような理由や根拠をもつことができれば，他者の思いや考えをもった理由を聞いて自己と対話することで，吟味がなされる場合があると考える。

自己の課題をもつ

理由を考える

対象の本質へ

【吟味を生み出す対話の例　体育ソフトバレー（中学年）から】



学習課題：作戦を考えよう

どうしたら勝つことができるか思いや考えを話し合い，共有し，グループで決める。

・サーブを工夫しよう。
・声をかけよう。
・パスをつなげよう。

なぜそう思うのか理由や根拠を比較検討する

いつパスがくるかわからないから，誰にパスをするか声かけをしよう。

片手だとボールがどこにいくかわからないから，両手で打とう。

吟味

ボールがひくいとパスがつながらないから，高く上げよう。

解決策を選んだ理由や根拠
ボールが速くてとりに行けないから，高くあげて，次につなげられるようにしよう。

解決策：ボールを高くあげよう

学びをふり返る
高いパスはレシーブしやすかったよ。
でも，力加減はむずかしかったよ。

このように，自己（グループ）の課題となり得る学習課題に対して理由や根拠を考えることでもう一段階深い対話が生まれていく。そして，課題が解決されても，また新たな課題が生まれ，吟味が繰り返される。互いに高めあう中で，タイミングや息を合わせる必要性に気付き，ソフトバレーにおけるチームワークやチームプレイの大切さという対象の本質に迫っていくことができるのである。

対話を深めるためには，子どもたち一人ひとりが理由や根拠をもって学び続けることが必要になる。ある対象について学び始める時にはその経験の少なさから理由や根拠をもつことは難しいと考えられる。しかし，それまでの既有経験・既習内容と関連付け，その段階での理由や根拠をもつことはできる。そして，その理由や根拠をもちながら対話を進めることによって，吟味が生まれるのである。理由や根拠をもたない思いや考えの対話は，同じ議論の繰り返しになったり，対象の本質から離れていったり，また，思いや考えの共有のみに終わってしまうことがある。我々がすべきことは子どもたちが，同じ土俵の上で対象への思いや考えに理由や根拠をもつことができるように課題を焦点化し，それらを表出し，他者との対話が行えるように個々の学びをみとり，適切な支援をしていくことである。そして，他者との対話によって新たにもたらされた理由や根拠について再び考えをめぐらせ，自己への認識を更新していけるようにすることである。

５．「学びの質の高まり」の実践例　４年生国語「ごんぎつね」

【授業の後半，兵十がごんをうってしまった後の思いについて話し合った場面】

○初発の感想から出された問題「ごんの思いは兵十に伝わったのだろうか。」
↓
○学習課題「ごんをうった兵十と兵十にうたれたごん。
このとき二人はそれぞれどんな思いだったのだろう。」

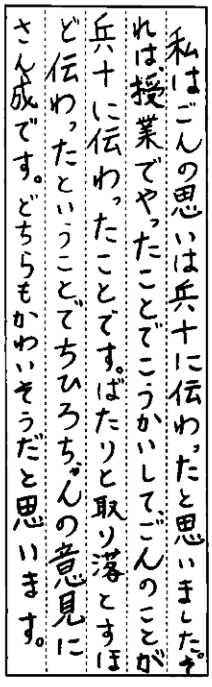
兵十の思いをさぐる

【小グループによる読みの交流後の兵十の思いについての子どもたちの現状】

ア：兵十はごんが栗を持ってきてくれたことに気づきびっくりしたと捉えている。
イ：本文全体からごんを撃ってしまったことを後悔していると捉えている。
ウ：**本文の言葉を根拠に**ごんを撃ってしまったことを後悔していると捉えている。

本文の言葉を根拠に吟味することで読みを深める

学びのふり返り


私はごんの思いは兵十に伝わったと思いました。それは授業でやったことでこうかいしてごんのことが兵十に伝わったことです。ばたりと取り落とすほど伝わったということでちひろちゃんの意見にさん成です。どちらもかわいそうだと思います。

兵十の思いについては，ア・イが多数を占め，ウは少数であった。

そこで，「後悔」という言葉を焦点化し，その読みが本文のどの言葉から出てきたものか，その**根拠**を**吟味**することで学びの質を高められると考えた。

C_1：（小グループで聞いた）C_2さんの考えでは，兵十はどんないたずらをされるか心配だった。だけど，そのあと後悔したと思う。うってしまった後は，くりをくれていたことをありがたいと思っている。
C_3：そうそう，後悔している。

T ：後悔っていう言葉，他のグループでも聞いたよ。どこからきているの。
C_4：４８段落，「火なわじゅうをばたりと取り落としました。」のところから，とても後悔していることがわかる。
C_5：４６段落，「おまいだったのか，いつもくりをくれたのは。」のところも兵十が後悔しているのがわかる。
C_6：その二つが関連している。

T ：今，Eくんが言った，「ごん，おまいだったのか，いつもくりをくれたのは。」に反応した子が多かったけど，この言い方でおかしいところないかな。
C_7：逆になっている。
C_4：どういう意味？
C_8：上と下をひっくりかえしても言える。

T ：（黒板に貼った紙を切って順番を入れ替える）読んでみて。
C_9：ごん，いつもくりをくれたのはおまいだったのか。
C_{10}：ああ！ならったことある。
T ：うん，倒置法っていうよね。ひっくりかえすのとでは，どうちがうかな。
C_{11}：ひっくりかえした方が，強く聞こえる。
C_{12}：それほどびっくりしたってこと。おどろいて後悔していることがわかる。
C_5：だから先に出していたのか。

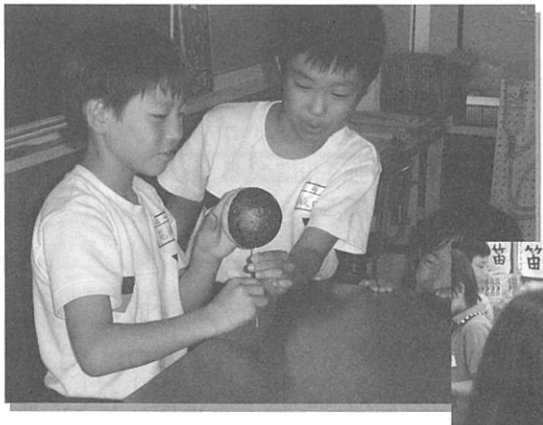
子どもたちは、「火なわじゅうをばたりと取り落としました。」という行動描写と「おまいだったのか，いつもくりをくれたのは。」の倒置表現に目を向けることで，読み取った兵十のおどろきの様子を**根拠**として，後悔の思いをとらえた。そうして，授業の前半で考えた「うたれた時のごんの思い」と後半で考えた「ごんをうった後の兵十の思い」をふまえ，初発の感想から出された問題「ごんの思いは兵十に伝わったのだろうか。」について，単元当初の自分の考えを振り返りながら自分の考えを書いた。

６．21 世紀を生きる力に

平成 23 年度より完全実施される新学習指導要領では，児童の「思考力」「判断力」「表現力」を育むために，知識・技能を活用する学習活動の充実を求めている。21 世紀の知識基盤社会を生き抜く子どもには，正しい価値判断や主体的･創造的な行動ができる資質や能力をもつことが望まれているのである。それらの能力を育むためには，学びの結果得られるもの以上に，学びの過程が重視されなければならない。よって我々は、学びの過程を大切にし，課題に向かって，三位一体の対話を行う中で，自分の身の回りにあるさまざまな問題を切り開いていくために必要な「創造的な思考力」「的確な判断力」「豊かな表現力」を育んでいく。そして，吟味の生まれる対話を続け，考え合い探求し合う協同的な学びをすすめることで，「課題発見力」「課題解決力」

を育んでいく。これらの力こそが，21 世紀を生き抜く子どもたちの生きてはたらく力になると考えている。

参考文献
教師の言葉とコミュニケーション　秋田喜代美　教育開発研究所　2010 年
質の高い学びを創る授業改革への挑戦ー新学習指導要領を超えてー
佐藤　学・和歌山大学教育学部附属小学校　東洋館出版社　2009 年
教師たちの挑戦ー授業を創る　学びが変わる　佐藤　学　小学館　2003 年
教育評価重要用語 300 の基礎知識　森敏昭・秋田喜代美　明治図書　2000 年
教師として学び続けることが…　矢野　英明　日本教育新聞社　2007 年
対話のない社会ー思いやりと優しさが圧殺するもの　中島義道　PHP 新書　1997 年
文部科学省ホームページ　http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/index.htm
教育研究発表会要項　和歌山大学教育学部附属小学校 2003 年
教育研究発表会要項　和歌山大学教育学部附属小学校 2007 年
紀要第３１集「互いのまなざしが響き合う学習」～一人一人への確かなみとりと支援によって～
和歌山大学教育学部附属小学校 2007 年
紀要第３２集「学びの質の高まりをめざして」和歌山大学教育学部附属小学校 2009 年
紀要第３３集「学びの質の高まりをめざして　～課題に向かう対話を深める～」
和歌山大学教育学部附属小学校　2010 年



《研究構想図》

【学校教育目標】
Enrichment－豊かな情操－　Intelligence－質の高い知性－　Creativity－輝く創造性－

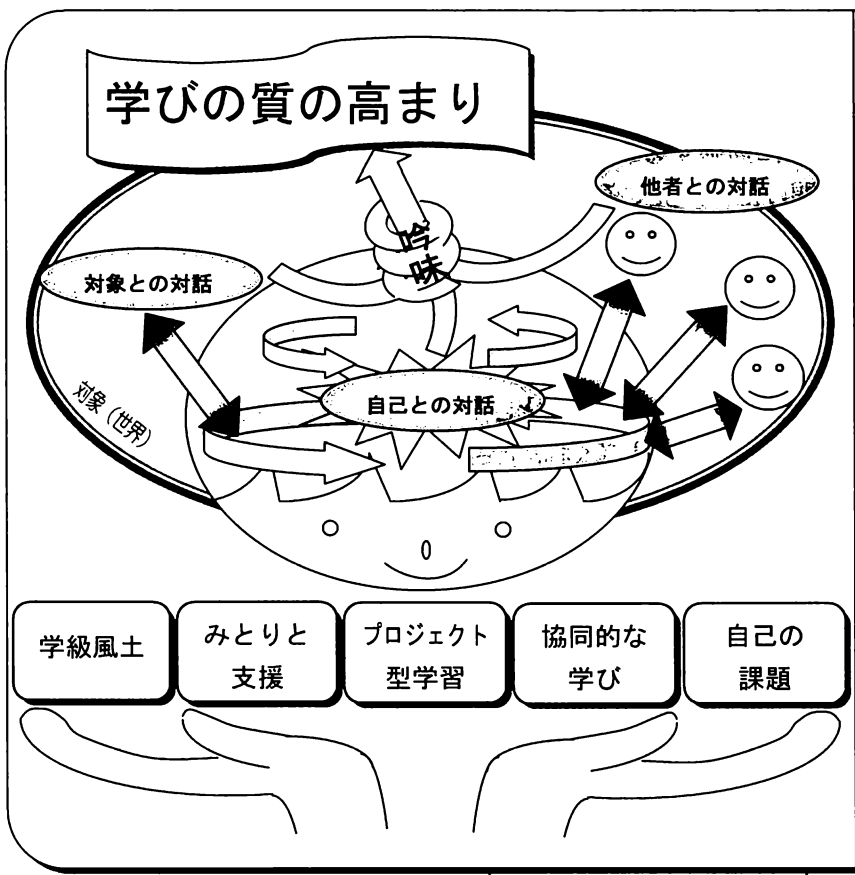
【めざす子ども像】
○対象・他者・自己と対話し，学習を楽しむ子　○仲間と協同し，市民性のある子　○自然と共生し，創造的に生きる子

研究成果と課題　子どもの実態　知識基盤社会における教育課題

【研究主題】

学びの質の高まりをめざして
～「吟味を生み出す対話」をつくる～

【研究仮説】
子どもたちが内面に自己の課題をもち，協同的な学びをすすめ，考え合い探究し合うかかわりを築くことで，対象・他者・自己との対話の中に吟味を生み出し，学びの質を高めることができる。



学びのデザインの視点

○課題設定の工夫
- 子どもたちの問題から
- 教材の価値や発展性
- 教師がつかませたいもの
- 資質，能力の育成

↓
○自己の課題へ

○吟味を生み出す対話
- 協同的な学びの創造
- 理由や根拠の表出
- 本質・真理や価値に迫る

○学びの質の高まりに向け
- 対象・他者・自己の認識を更新する。

授業の実際・評価

【確かな学力を育む】
○創造的な思考力　○豊かな表現力　○的確な判断力　○課題発見力　○課題解決力

研究の評価

学びのアンケートについて，設問表（中高学年用）

【4択形式】

質問 1：授業中，グループで活動をするのは好きですか？
質問 2：学級全員での話し合いで，あなたは自分の意見を言うことができますか？
質問 3：グループの話し合いなどで，自分の意見を言うことができますか？
質問 4：グループでの話し合いで，あなたは友達の話を聞いていますか？
質問 5：話し合いをするとき，友達の気持ちを考えていますか？
質問 6：授業の中で，「なにを考えたらいいの？」と思うことがありますか？
質問 7：自分の考えと違うところがあっても，グループや友達と決めたことに協力できますか？
質問 8：みんなで話し合うことは好きですか？
質問 9：話し合いをすることでわかることは多いですか？
質問10：一人で学習することは，友達と学習することよりもよくわかりますか？
質問11：グループでの話し合いは，意見がまとまらず大変ですか？
質問12：授業で自分の学習したいことと，クラスで学習することが違うことが多いですか？

【選択形式】

質問13：わからないことがあったとき，あなたはどうしますか？
1. 一人で調べる 2. 友だちにきく 3. 先生にきく 4. おうちの人にきく 5. その他

質問14：グループや友達などといっしょに勉強することの「良いところ」はどんなところですか？
1. 友達の考えがわかったり、聞けたりするところ 2. 全員のときより意見を言いやすいところ
3. 1人で考えるよりよくわかるところ 4. 話しあったり、協力したりできるところ
5. 友達のわからないところを教えられるところ
6. 新しいことを知ったり、自分のまちがいに気づいたりできるところ

質問15：学習内容を「よくわかった！」と思えるときはどんなときですか？
1. 友達の意見を聞いたり、友達がせつめいしてくれたとき 2. 先生がせつめいしてくれたとき
3. 話しあいをしたとき 4. 自分でよく考えたとき
5. 辞典や図鑑、コンピュータなどで調べたとき 6. むずかしい問題がとけたとき

質問16：勉強していて「自分が成長した」と思えるときはどんなときですか？
1. わからないことがわかったとき 2. 自分の考えを友達にわかってもらえたとき
3. むずかしい問題がとけたとき 4. 前にできなかったことができたとき
5. テストの点数が良かったとき 6. 手をあげて、意見を言ったとき

質問17：「勉強したい！」「調べたい！」と思えるのは、どんなときですか？
1. わからない、知らないとき 2. むずかしいとき 3. 楽しい、好きな勉強のとき
4. ふしぎに思うとき 5. 興味があるとき

質問18：話しあいなどで友達の考えとちがうとき、あなたはどうすることが多いですか？
1. 友達の意見と自分の意見を合わせる 2. 友達の意見に変える 3. 友達の意見をよく聞く
4. 理由の話しあいをする 5. もう一度、考える 6. 自分の意見をもう一度、言う